

「正広日記」注釈(上)

稲田 利徳

「正広日記」は室町時代の歌僧正広の紀行文で、文明五年八月、友人に勧誘され、長谷寺から伊勢に赴き、そこから伊良湖へ渡海、東海道を下って駿河藤枝に滞在、やがて宿願であった富士山を眺望するまでの旅程を綴ったものである。本稿はその作品に、「語釈」「通釈」「考」に区分し、総合的な注釈を加えたものである。

Keywords: 紀行・歌枕・富士山・和歌・駿州

解説

室町時代の歌僧正広(応永十九年—明応二年)に「正広日記」という紀行文がある。

正広は十三歳のときに正徹に師事し、師が逝去するまで約三十年余りにわたり、愛弟子として近侍した歌僧である。正徹の没後は招月庵を継承し、師の歌友圏の維持に努めるかたわら、師の歌稿を整理して「草根集」を編纂している。また、彼自身も膨大な家集「松下集」を残しているが、それによると、周防の大内氏、能登の畠山氏、若狭の池田氏などといった地方大名との間を、和歌を介して渡り歩いて行く歌壇活動のさまが詳細に辿られる。その活動と名声は、当代の連歌師宗祇に匹敵するものがあり、地方への文化伝播者としての役割は特筆すべきものがあつた。その伝記と著作類に関しては、拙著『正徹の研究』(第一編第三章第二節)に詳論している。

「正広日記」の書名は、諸本によって、「日比正広記」「正広東紀行」「正広道記」「海道記」などと、種々に呼称されており、一定しない。元来、作者正広自身も特定の作品名を付与していなかった可能性もあるので、ここでは、紀行文文学史や文学辞典類で登載されている「群書類従」(巻三三六)所収本の書名「正広日記」を用いることとする。

さて、「正広日記」は、正広が六十二歳の老齢の頃に遂行した富士山歴覧記とも称すべき紀行文である。彼は応仁の乱を避けて長谷寺に仮寓していたが、文明五年(一四七三)八月七日、偶々、長谷寺参詣に来た摂津修理大夫之親と対面、誘われるままに、宿願でもあつた富士山一見のために東国下向を行う。

伊勢国の大江港から伊良湖へ渡海し、之親の所領地でもあつた駿河国藤枝に着、長楽寺に旅装を解いている。そこを足場として、九月には念願だつた富士山を眺望、その感慨を十首の和歌に詠じ、それを「富士浅間」に奉納している。ついで寺の本尊が薬師如来であることを知り、随伴した弟子桂厚の病氣平癒の祈禱のため「南無薬師瑠璃光如来」を冠字に置く十四首の和歌も詠出している。その後、宇津山・清見が関・三保が崎などの歌枕を訪ねるとともに、今は亡き師正徹と交誼のあつた今川範政の孫義忠と対面したり、亡師から歌の指導を受けたという埴谷備前入道常純の訪問を受けるなど、在地の歌人たちと交誼を

岡山大学教育学部国語教育講座 七〇〇—八五三〇 岡山市津島中三一一一
 An Annotation of "Shokōnikki" (Part One)
 Toshinori INADA
 Department of Japanese Language Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1, Tsushima-naka, Okayama 700-8530

重ねた後、やがて帰路につくまでの旅程を綴っている。
 末尾には「文明五年霜月 日 釈正広」とあるので、その頃には一応、成立
 していたと考えられる。

「正広日記」の諸本は所々にかなり散在するが、これに関しては、佐藤智広
 氏が「『正広日記』本文考」（昭和学院短期大学紀要、第三十三号、平成九年三
 月）を公表している。これは島原市立図書館蔵松平文庫本を翻刻し、それと写
 本十七本と校合した詳細な作業報告である。これまでに私も幾本かの諸本を調
 査したが、諸本間にそれほど大きな異文関係は認められない。なかでは松平文
 庫本が、比較的、安定した本文を備えていると判断したので、これを底本にし
 て注釈を行うこととした。

なお、底本に採用した島原市立図書館蔵松平文庫本の書誌は次の通りである。
 縦二七・三糎、横二〇・〇糎の袋綴写本一冊。表紙は濃青色下地菱型花模様
 入り。題簽は左肩に貼付され「日比正廣記」と書名を記す。内題はない。本
 文料紙は薄様の斐紙。一面十行書で歌は一首一行書。墨付は九丁。江戸初期
 頃の書写本。奥に「文明五年霜月 日 釈正廣」の後に「此一帖以他本書写
 之處晴雲有／後見尤可為證本歟」の奥書が在する。

凡例

一、本稿は正広の紀行文「正広日記」の注釈である。
 一、底本には島原市立図書館蔵松平文庫本を採用し、次の方針で校訂本文を作
 成した。

- (1) 漢字・仮名を原則として通行の字体に変え、新字体のある漢字はそれを用
 い、濁点、句読点を施した。
- (2) 底本の仮名を漢字に改めた場合は、表記を改めた本文の右側に、もとの仮
 名を記した。また、底本の漢字の読みを（ ）の内に示したものもある。
- (3) 仮名遣いは原本のままとし、送り仮名を補った場合は（ ）内に記した。
 また歴史的仮名遣いと一致しない場合は、（ ）を付して歴史的仮名遣
 いを傍記した。ただし、仮名に漢字を宛てた場合は、これを省略した。
- (4) 反復記号は底本のままとし、踊り字の場合は、もとの仮名に直し、右側に
 「ヽ」を付した。
- (5) 底本の丁数などは省略し、本文も適宜改行した。

(6) 全体を適当な箇所区切り、通し番号と内容に即した見出しを付した。
 (7) 底本の本文を他の伝本で校訂したところは「」でそれを示し、その旨
 を「語釈」欄の所で触れた。

一、注釈は「本文」「語釈」「通釈」「考」の順序で進める。
 一、「正広日記」の翻刻を御許可くださった島原市立図書館（島原市教育委員
 会）に対し、厚くお礼を申し上げます。

* * * * *

「正広日記」

一 泊瀬寺からの旅立ち

世の中みだ乱れて後は、都みやこに跡を留とどむべきさまにもあらで、大和国泊瀬寺
 に知る所有しゆり（り）て年月を送り侍るに、文明五年八月七日に、つとめ
 て起おき侍れば、観音へ参る人の尋まね侍るとあるを見れば、摂津修理
 大夫之親にて、対面し、手を打ちて、「代かの変わり侍るに久ひ（しく）見参
 にも入い（り）侍らぬ」など語りて、「不思議のことと思おも（ひ）侍る。さ
 て、いづくへ」と問と（ひ）侍れば、「駿河国しるに知る所有しゆり（り）て下り侍
 る」とあれば、「さては富士をこそ見給はめ」と羨み侍れば、「更さらばいざ
 かし」とあるに、とても捨すて果はつる身にて、いづくに跡を留とどむべき事こと
 もあらねば、幸さいひのさいことと覚おぼえて、そのまま出い（で）て、行く末ゆのこと
 などを思おもひたどり侍らで下りぬ

「語釈」○世の中乱れて後―応仁の乱（応仁元年～文明九年）をさす。京都は
 戦乱の巷となり、幕府の権威は地におち、社会・文化の崩壊をきたした。○都
 に跡を留むべきさまにもあらで―戦乱のために京洛に安住の地を定めえなくな
 った嘆息。「正広三百六十番自歌合」跋文にも「応仁元年五月より世の中みだれ
 侍るに、草庵もすて都のほかにはさすらひ侍る」とみえる。○大和国泊瀬寺―奈

良県にある長谷寺のこと。真言宗豊山派の総本山。桜井市初瀬。豊山神楽院と号す。西国三十三番所第八番札所。本尊は長谷寺式十二面観音像。古くから観音靈場として繁栄。○知る所―知人の居る所。作者が長谷寺の智恵光院に仮住していたことは、家集「松下集」の「南都もすみうくて長谷寺智恵光院といふ坊にしばしすみ侍り」で確認できる。○文明五年八月七日―文明五年は西暦一四七三年。後土御門天皇の御代。將軍は足利義政。この年の三月十八日に山名持豊没(七十歳)、ついで五月十一日には細川勝元没(四十四歳)で、戦乱が下火になっていた頃。○撰津修理大夫之親―「撰津」は旧国名。一部は今の大阪府、一部は兵庫県に属する。「修理大夫」は修理職の長官。「之親」は幕府評定衆、伊丹領主。伝本によっては「元親」(神宮本・書陵部甲・丙本など)とするものがある。○手を打ちて―偶然、知人に出合ったときの歓喜の身体的行為。「今たがひに手を打ちて大笑す」(なぐさみ草)。○駿河国―旧国名。今の静岡県の中央部。駿州。○知る所―ここは「之親」の知行所。領知。「松下集」に「駿河国藤枝といふ所は領知にて下られ侍るに」とあり、具体的には藤枝に存在することが確認できる。○いざかし―「かし」(終助詞)は説得や確認のために、念を押す気持を表す。○捨て果つる身にて―師正徹の紀行文「なぐさみ草」にも「いにし三月の末かとよ、根に帰り古巢を急ぐ花鳥の身さへ、あととどむべきかたなくなりぬれば……もとより、かかる世捨人は、いづくかはここを定むべき宿もあらましを」と類似の表現がある。○ことなどを―「を」諸本にナシ。

「通釈」世の中が乱れてから後は、都に住居を定めることもできない有様で、大和国の泊瀬寺に縁があり、そこで年月を過してしたが、文明五年八月七日に、早朝に起きてみると、(長谷)観音へ参詣する人で、私を尋ねているという人を見たところ、撰津修理大夫之親であり、対面して互いに手を打って「世の中が変ったため、長い間、お目にかかることもなかったことです」などと語り、「(ここで逢うのは)奇遇のことと思います。それで、どこへお出掛けですか」と尋ねたところ、「駿河国に知領所があり、そこへ下ります」との返答だったので、「それでは富士山を御覧になりますね」と羨んだところ「それなら一緒に参りませんか」と誘われたので、それにしても世を捨て果てた我が身には、どこに人跡を留めるべきだということもないので、これは幸便だと思ひ、そのまま出発し、これから将来のことなど気にかけないで下って行った。

「考」○応仁元年の大乱以降の正広の居住地の跡を辿っておくと、まず「応仁

元年五月のすゑつかた、都やぶれて後、住むところ侍らで、南禅寺、東福寺などにやすらひて後、南都にくんだり、南里といふところに小庵ありて年をとり侍る」(松下集)という回想から、応仁元年五月の末以降、南禅寺、東福寺に住み、ついで南都の南里に庵を結んだようである。さらに南都も住み憂くなつて、長谷寺智恵光院という坊に住んだのは、「老のなみ六十年をこえて補陀羅くにいたるとみれば小初瀬の山」(松下集)の詠歌から判断して、文明四、五年頃かと推測される。その間正徹の遺稿を整理し、「草根集」全十五巻を編纂、兼良の序文を得たのは文明五年七月のことである。この大業完成の安堵感もあつて、翌月の八月に撰津修理大夫之親に誘われるままに、駿河下向の途についたと思われる。○長谷寺での之親との邂逅から旅立ちを綴るこの冒頭文には、生涯に一度でよい、秀麗と伝え聞く富士山を眺望したいとの正広の熱い願望が横溢している。それを背後から急ぎ立てているのは、乱世における自己の生命の危うさと老い、それに世を捨て果てた身の漂泊感であった。旧友之親の誘いに、後先のことなど念頭にせず、急遽旅立った心のうちに、富士山を一見すれば、旅先で儂くなつても悔いはないといった思念が潜在していたであらう。

二 伊勢から小夜の中山へ

伊勢の山田といふ所に、四、五日休らふ事ありて、十五日、大江といふ所より舟に乗り、伊良湖の渡りとして、すさまじき所を越し侍るに、今宵は十五夜なりけり。昔は、所々にて歌など詠み侍るに、思ひのほかなる心地して、楫の枕に逢もる月をわづかに見て、

いにしへを思ひ伊良湖の月見れば權の雲ぞ袖に落(ち)そふ

十六日、舟より上りて、瀧浜とて浪のあらしくしき所を越(し)侍るに、名所など多く有(り)と聞(き)しかども、問ふべきも人もなし。

白須賀と云(ふ)所のあさましき蠻の苦屋に、一夜浪の音を枕にて明かし侍るに、歌など詠むべきさまにもあらず。人く立ち騒ぎ出(で)行(く)に、見付の国府うち過ぎ、小夜の中山を超え侍るに、彼(の)西

行上人「年たけて」など詠じ侍るもあはれに思ひ出(で)られて、

月ひとり都の友ぞ我にかせ雲の衣を小夜の中山

それより下り侍るに、心のうち歌など詠み侍れども、語(る)べき友もあらで詠み捨て侍る。

「語釈」○伊勢の山田―三重県伊勢市山田。古くは山田原という。山田原は外宮周辺の狭い地域をさしたが、のちに民家が増えて、山田が市街地の総称となる。ここでの四、五日滞在の間に、伊勢神宮参拝を行った可能性がある。○大江―三重県南島町に「大江」があるが、地理的にみて該当しない。『日本紀行文学便覧』は「伊勢市大湊町か」とする。「大湊」であれば、宮川の支流大湊川と勢田川・五十鈴川の合流点の三角州上に位置。○伊良湖―愛知県渥美郡渥美町伊良湖にある地方港湾。三河湾国定公園に伊良湖岬がある。参考歌「浪のおるいらこのさぎをいづる舟はやこぎわたせしまきもぞする」(堀河百首・国信)。「大江」から「伊良湖」へ舟で渡ったことは、「松下集」にも「ふと思ひ立ちて伊勢の大江と云ふ所より舟にのり、いらこの渡とてすさまじき所を、八月十五夜にこし侍る」とみえる。○今宵は十五夜…昔は所々にて歌など詠み侍る―八月十五夜には、その昔、所々にて詠歌したことを懐古。「寛正五年」八月十五夜、左京兆にて続歌有りし中に(松下集)は、その事例の一つ。○思ひのほかなる心地―八月十五夜の名月に際し、歌会に参加した昔と、乱世のために風雅な試みも行えぬところに隔世の感を催した心境。○楫の枕―楫を枕にして寝る意から、船中で寝ること。船路の旅。例歌「うらづたふいそのとまやのかぢ枕ききもならはぬ浪のおとかな」(千載集・羈旅・俊成)。○「いにしへを」の歌―「松下集」では第五句「袖に露そふ」と異文。「いにしへを思ひ」とは、その昔、八月十五夜に歌会で詠歌したこと回想。「伊良湖」に「思ひ出づ」を掛ける。「權の雫」は涙の雫でもある。例歌「わがうへに露ぞおくなるあまの河とわたる舟のかいのしづくか」(古今集・雑上・よみ人しらず)。○鴻浜―静岡県榛原郡相良町に「片浜」があるが、経路として該当しない。あるいは普通名詞か。○白須賀―静岡県湖西市白須賀。白菅とも書く。浜名湖の西岸、笠子川・坊瀬川の上流に位置、遠州灘に面す。○蟹の昔屋―昔で屋根を葺いた粗末な漁師の家。○浪の音を枕にて―波を枕にする意から船中で

旅泊することだが、ここは枕もとに波の音が聞えること。例歌「なみまくらいかにうきねをさだむらんこほりますだのいけのをしどり」(金葉集・冬・前斎宮内侍)。○見付の国府―静岡県磐田市見付。天竜川下流と太田川の間、今ノ浦川上流域に位置。○小夜の中山―今の静岡県掛川市と榛原郡金谷町との間にある峠。日坂宿と菊川宿の間の東海道の難所の一つ。名所歌枕。○西行上人「年たけて」など詠じ―西行の著名な歌「としたけて又こゆべしとおもひきや命なりけりさやの中山」(新古今集・羈旅)をさす。○あはれに思ひ出でられて―作者正広もこの年六十二歳の老齢。西行の感慨と重ねて「あはれ」と実感したこと。○「月ひとり」の歌―「雲の衣」とは、月を覆っている雲の比喩。その衣を自分に借してくれと希求するのは、小夜の中山で寒さを防ぐと同時に、今では都で見た唯一の友である月光を明るくさせることによる。「小夜」は地名と「夜」を掛ける。参考歌「山のはにくものころもぬぎすててひとりも月のたちのぼるかな」(金葉集・秋・源俊頼)、「とへかしの雲の衣をかさねてもあらしさむけき峰のいほりを」(新後撰集・雑中・津守国助)。○語るべき友もあらで―詠歌を理解し合う友もないとするが、後に明かなように、弟子の桂厚を随伴している。ここは孤独な旅を強調する粉飾もあろう。

「通釈」伊勢の国の山田という所に、四、五日滞在することがあって、十五日に大江という所から舟に乗り、伊良湖の渡りといって、(波の)荒々しい所を越えようと、今宵は十五夜であった。その昔は、(十五夜には)所々にて和歌などを詠んだが、(今の様子を思い)心外な気持がして、楫を枕に船中で臥し、篷から洩れる月光をほのかに見て、

過ぎし昔のことを思い出しながら、伊良湖の月を眺めていると、權の雫(涙)が袖にしたり落ち添うことよ。

十六日には、舟から上陸し、鴻浜といって浪の荒々しい所を越すとき、(この辺には)名所が沢山あると耳にしたけれども、それを尋ねる適当な人もいなかった。白須賀という所の、みすばらしい蟹の昔屋に一夜、浪の音を枕に聞き明かしたが、和歌など詠めるような状況ではなかった。人々は騒々しく出発して行き、見付けの国府を通り過ぎ、小夜の中山を越える時、かの西行上人が、ここで「年たけて」の歌などを詠じたことも、しみじみ想起され、

ここ小夜の中山では月だけがただ一人の都の我が友であるのに、それすら雲の衣を着て姿が見えない。せめてその雲の衣を脱ぎ、私に夜具に借してくれ、そして光を現わしてほしい。

そこから下って行くとき、心のなかで和歌など詠じたけれども、それを見せ
て語り合う友もいなくて、そのまま詠み捨ててしまった。

「考」○駿河に到着するまでの旅は辛く苦しいものだったようで、大江から伊
良湖へ舟で渡るときも、「すさまじき所を越し侍る」と嘆息し、舟から上がっ
て瀧浜を行くときも「浪のあら／＼しき所を越し侍る」と、そのさまを強調し
ている。○旅中で八月十五夜になったことで、懐旧の情を催したが、和歌を詠
めるような状況や心境になれないさまを、「歌など詠むべきさまにもあらず」
と嘆き、まれに詠じて、それを示して「語るべき友」もないと孤独を噛みし
めている。○語釈では触れなかったが、この部分の記述には、「源氏物語」須
磨の巻が重層されているのではなからうか。例えば「今宵は十五夜なりけり。
昔は、所々にて歌など詠み侍るに」と、十五夜に巡りあって歌会の場面を懐旧
するのは、「源氏物語」（須磨）の「月のいとほなやかにさし出でたるに、こよ
ひは十五夜なりけり」とおぼし出でて、殿上の御遊び恋しく、所／＼ながめ給
ふらむかしと思ひやり給ふにつけても」を想起させる。さらに「いにしへを思
ひ伊良湖の月見れば懼の雫袖に落ちそふ」の歌の「懼の雫」という措辞も、
「来し方の山は霞みはるかにて、まことに三千里のほかの心ちするに懼の雫も
耐へがたし」（須磨）にみえる。また「蜚の苦屋に、一夜浪の音を枕にて明か
し侍る」の状況も、光源氏が流謫の地須磨にあって、「ひとり目をさまして枕
をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波ただこもとに立ちくる心ちして」の
場面を想起させる。このように作者正広は、東国へ下向する自身を、「源氏物
語」の須磨の光源氏の心境と脈絡させて記述していたのではないかと推測される。

三 駿河滞在・富士山眺望

さて十九日に、駿河国藤枝といふ所は、彼（の）領知にて、長楽寺と
云（ふ）寺にをの／＼かりそめに住み侍る。「さても今日まで空雲らは
しくて、不尽を見侍らぬ」と人に語り侍れば、「小河といふ所は、残
（り）なく見ゆる」とて、廿六日、人々ともなひて赴き侍（る）に、
折節浜風あら／＼しく、雲など立ち騒ぎて、富士も見えず。むなしく帰
り侍るに、其（の）夕より、桂厚とて連れ侍る僧を、瘡とか殊の外煩

（ひ）て伏し侍る。何事も心に入らで扱ひしに、長月一日の比、なをざ
りにて心をのべ侍るに、「その辺りに鬼岩といふ山よりこそ富士は見ゆ
る所なれ」とて、人のいざなはれしほどに、うれしくて、老の坂苦しけ
れども、上りて見れば、東に高草山といふ山の上より、雲など殊に晴れ
て、さだかに見え侍れば、年月の望みも晴るるか心地して、

富士はなを上にぞ見ゆる藤枝や高草山の峯の白雪

「語釈」○藤枝―静岡県藤枝市。志太山地南部から大井川扇状地にかけて位置。

○彼の領知―摂津修理大夫之親の領地。先引の「松下集」の「駿河国藤枝とい
ふ所は領知にて下られ侍る」と符合。また之親の所領は藤枝の益頭庄という。

○長楽寺―藤枝市本町、岡出山の麓にある寺。青龍山と号し、臨濟宗妙心寺派。
本尊は釈迦如来。「松下集」では「廿日、駿州藤枝と云ふ所に、長楽寺と云ふ
寺に各着きすみ侍る」とあり、「十九日」でなく、一日のずれがある。○雲ら
はし―曇り模様である。用例「夕闇過ぎて、おぼつかなき空のけしき雲らはし
きに」（源氏物語・蜚）。○小河―静岡県焼津市小川。「小河」とも書く。焼津

村の南に位置し、東は駿河湾に面する。○桂厚―正広が東国下向に際して随伴
した弟子。「親元日記」（政所賦銘引付）の文明八年九月十六日の条に「松月庵
桂厚」が、寛正五年十二月永代買得の丹波国船井郡広瀬村の名田九段を違乱さ
れた旨がみえる。すると正広は招月庵を桂厚に与えていたか。詳細な伝記は未
詳だが、足利義政勸進の「文明十一年四月二十六日崇徳院法楽百首」、「文明
十三年三月十八日歌合」（判者正広）、「長享二年七月八日宗匠家月次歌合」
などはじめ。正広とともに歌会に出座している。肖柏の「春夢草」には「僧桂
厚うせにし時、桂久につかはす」の詞書で、「言葉の道にいくとせそなれ松さ
てもおくれし老の浪かな」とみえ、肖柏と交誼があり、「桂久」なる弟子がい
たことも窺える。○僧を―「を」諸本ナシ。○瘡―隔日、または毎日、一定の
時間を置いて発熱する病氣。「わらはやみ」とも称した。○なをざりにて―病
氣の重さがそれほどでもない状況。○心をのべ侍る―気分がほっとする。○鬼
岩といふ山―藤枝市藤枝の鬼岩寺の裏山をさす。鬼岩寺は蓮華寺公園南方の山
麓にあり、楞嚴山と号し、高野山真言宗。本尊は聖観音。「富士御覽日記」（永
享四年九月十七日の条）にも足利義教が「駿河国藤枝鬼岩寺に御下着」とみえ

る。○老の坂—文明五年、作者正広は六十二歳の老齡。○高草山—静岡県焼津市の高草山。アルカリ玄武岩溶岩からなる山。標高五〇一・四メートル。「松下集」によると「九月五日、高草山といふ山へあがり富士を初めてみるにかたびら雪とかわづかにふれり」と、富士山を初めて眺望した場所を「高草山」とし、「正広日記」の「鬼岩といふ山」と相違する（「考」参照）。○「富士はなほ」の歌—富士山の高さを強調するため、「高草山」にかかる「峯の白雲」より上に見える」と詠歌。参考歌「よそにのみ見てややみなんかづらきやたかまの山の嶺のしら雲」（新古今集・恋一・読人しらす）。

「通釈」さて十九日に到着し、駿河国の藤枝という所は、彼の領地で、長楽寺という寺に、それぞれ、一時の居を定めた。「それにしても今日まで空が曇り模様で、富士の山を見ないことだ」と、人に語ったところ、「小河という所からは、（富士山が）残るところなく見える」ということで、二十六日に人々を伴って出掛けたが、折から浜風が荒々しく吹いて、雲などが立ち騒ぎ、富士山も見えなかった。むなしく帰って来ると、その日の夕方から、桂厚といつて伴に連れてきた僧が瘧とかいう病気にかかり、たいそうわずらって床に臥してしまった。他のことは何事も頭に入らず、ひたすら看病したところ、九月一日頃から快方に向い安慰した頃、「その辺にある鬼岩という山からは、富士山が見えるらしい」ということで、人が誘ってくれたので、嬉しくなり、老齡で坂を登るのは苦しかったけれども、そこへ上って見ると、東の方に、高草山という山の上から、雲などもすっかり晴れて、（富士山が）くっきりと見えたので、長年の願いも叶って、晴れ晴れとした気分になり（次の歌を詠じた）。

富士の山は、藤枝で高いという名をもつ高草山の峯の上の白雲よりも、なおその上に姿が見えることよ。

「考」○藤枝に到着後も、すぐに富士山を眺望できなかった。空が曇りがちで長楽寺からも眺められず、全貌が見えると人づてに聞いた小河に出掛けたが、ここからも果せなかった。そして、ようやく鬼岩という山から、晴れわたった空の彼方に富士山の姿を眺めることができた。ここには長年の望みを叶えることができた喜びの情が溢れている。○「語釈」にも記したように、「正広日記」と「松下集」とでは初めて富士山を眺望した月日と場所とが相違する。「松下集」は「九月五日、高草山といふ山へあがり富士を初めてみるにかたびら雪とかわづかにふれり」とある。一方、「正広日記」の「長月一日の比……」は、桂厚の病気が快復した月日で、実際に遠眺した日は「松下集」のように「九月五

日」とみるべきかもしれない。けれども、富士山を見た場所を高草山の上に登ってとするのは、正広の記憶違いではなからうか。高草山は焼津市にあり、藤枝から少し離れているし、「富士山はなほ」の歌の富士山は東の方、高草山のさの上に姿を現したと詠じた内容から判断しても、鬼岩の山から眺望した可能性がある。なお、広島大学蔵「宗祇下草註」に合綴の「制詞歌」の奥には「駿羽鬼岩寺竜徳院 長允 招月迷路者」とあるが、この「招月迷路者」は正広のことで、正広がこの旅で鬼岩寺の長允なる人物に「制詞歌」を書き与えたものとされる（金子金治郎著『新撰菟玖波集の研究』参照）。○旅立ちとその道中では、孤独な旅の雰囲気を綴っていたが、実際は桂厚という弟子を随伴していたことが、ここで判明する。弟子桂厚が病気になり、「何事も心に入らずで扱ひし」には、弟子思いの優しい正広の一面が察知できる。さらにそのことは、後に、本尊の薬師如来に十四首の病氣平癒の祈禱歌を奉納する事実でも窺える。

四 富士山十首詠歌

さて立（ち）帰りて筆に任せて、十首詠み侍る。

尋（ね）てもなごか見ざらむ富士ならでそれも名高き小夜の中山

富士やこれ雲間の嶺にあらはれて先（づ）めづらしき秋の初雪

おなじくは不尽のみ雪を分（け）見ばや身は蛭の子の老ぞ苦しき

清見瀉富士はうしろの山風見ぬ雪散らす浪の荒垣

富士の根は雲井に高し大比叡やはたちあげてもいかで及ばん

時知らぬ山こそあらめ富士川やそれさへ雪の高き浪かな

夜や寒き鶴が岡辺の鶴の声つばさの霜に富士の白雪

嶺崩す浮島なくば足高や雲間に富士を並べてぞ見ん

吾妹子が黒髪山は富士の嶺のいたたく雪を哀（れ）とや見ん

富士は見つ又もぞ思ふ秋の風聞かばや行きて白川の関

かやうに詠みて、富士浅間に奉りし。

「語釈」○立ち帰って―鬼岩から富士山を眺望して住居に帰っての意。○筆に任せて―筆の赴くままに。和歌にあまり意匠を凝らさずに軽く詠じた意を込める。○「尋ねても」の歌―「小夜の中山」を越え、そこで「月ひとり」の歌を詠じたことは先述した。「それも名高き」の「それ」は「小夜の中山」をさし、「高き」は富士山の高さとかかわりながらも、有名な歌枕の意を込める。著名な歌枕「小夜の中山」への挨拶歌。○「富士やこれ」の歌―高草山の上に棚引く雲の上に、ぬくくと姿を現した富士山を眺望したときの感嘆。今は九月なので、珍しい「秋の初雪」とする。「松下集」によると、その雪を「かたびらゆきとかわづかにふれり」とする。○「おなじくは」の歌―「松下集」では第五句「老ぞかなしき」と異文。「蛭の子」は伊奘諾と伊奘冉の二神の間に生まれた子だが、三歳になっても足が立たなかったという。「次生蛭児」。雖曰三歳、脚猶不立。故載之於天磐櫛樟船、而順風放棄（日本書紀・神代上）。参考歌「わたつ海にしなへうらぶれ蛭の子の脚立たざりし年は経にけり」（源氏物語・明石）。「理りの老はよのつねひるのこの足たたぬ年の暮ぞかなしき」（草根集・巻十四）。○「清見瀉」の歌―「松下集」は第二句「富士はこし路の」と異文。「清見瀉」は駿河湾の湾奥部、清水市東部の興津に面する海岸。「荒垣」はここでは清見が関の外側の垣根。「見ぬ雪」とは、山風で浪が荒れて飛沫となっているのを富士山の雪に比喻したものか。○「富士の根は」の歌―「比叡」は京都市左京区と滋賀県大津市の境に位置する山。山頂は東西に分かれ、大比叡ヶ岳は八四三・三メートル。「大比叡やはたちあげても」は、「伊勢物語」（第九段）の「その山（富士山）は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける」を念頭に作る。○「時知らぬ」の歌―「時知らぬ山」とは時節をわきまぬ山で、富士山のこと。「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子またらに雪の降るらん」（伊勢物語・第九段）による。「富士川」は、静岡・長野・山梨の三県にまたがって流れる一級河川。源流は赤石山地北部に発し、駿河湾奥に注ぐ。「雪の高き浪」は高い白浪の飛沫を雪に見立てたもの。類想歌「時知らぬ山こそあらめ夏の夜の月さへこほるふじの川波」（新葉集・夏・二品法親王聖尊）。○「夜や寒き」の歌―「鶴が岡辺」は、静岡県の大井町にも鶴ヶ岡八幡社があるが、ここは鎌倉市雪ノ下にある鶴岡八幡宮の岡辺をさすか。「鶴の声」は「焼野の雉子、夜の鶴」と、子を思って鳴く親の悲しい声とされる。「つばさの霜」は鶴の白い羽を霜に比喻。例歌「すむ鶴のつばさの霜も年ふるき松に契りて幾世へぬらん」

（草根集・巻二）。○「嶺崩す」の歌―「松下集」は第三句「あらたかや」と異文が存するが「足高」が妥当。即ち「愛鷹山」に作り、「ハシタカ」「アシタカ」とも。富士山の南麓に突起する峻嶺。「浮島」は「浮島が原」のことで、富士山・愛鷹山南麓と駿河湾奥に沿って発達する田子の浦砂丘との間に位置する低温地域。「嶺崩す浮島……」は、「また足高山、富士より東にあり。この山は唐土のとなり。富士に岳くらべせんとて日本へ来るを、あしがらの明神けくづさせ給ひて、富士よりひきしと云ふ也。駿河の沖に浪のごとくにありけるを、神力を以て今、浮嶋が原と成しと云々」（名所方角抄）との故事を踏まえての詠歌。○「吾妹子が」の歌―「松下集」は第三句「ふじのねに」と異文。「黒髪山」は「万葉集」にみえるものは大和（奈良県）のものと考えられるが、ここは富士山との地理的関連からみて、栃木県の日光連山の一つ男体山を念頭にするか。「吾妹子が黒髪山」とは、我がいとしい女性のつややかな黒髪という名をもつ黒髪山の意で、下句の富士山の「いたたく雪」を老人の白髪に比喻、対照する。それによって黒髪山が富士山を「哀れとや見ん」の発想も成立する。黒髪山との関連で雪を白髪に見立てた例歌「むば玉のくろかみ山に雪ふれば名もうづもるる物にぞ有りける」（堀河百首・俊頼）。○「富士は見つ」の歌―「白川の関」は陸奥の歌枕。岩代国、今の福島県の白河市にあった平安時代の重要な関所。白河の関で「秋の風」を聞きたいとの願望は、著名な能因法師の「みやこをばかすみともにとちしかど秋風ぞふくしらかはのせき」（後拾遺集・羈旅）による。○富士浅間―普通「富士浅間」といえば、静岡県富士宮市にある富士山本宮浅間大社をさすが、駿河国内には浅間神社は多く、静岡市の静岡浅間神社をはじめ百四十余りがあるという。作者は現在藤枝に滞在しており、富士宮市の浅間大社に奉納するには遠距離である。『日本紀行文学便覧』は「静岡市の浅間神社か」とする。または、藤枝市の近辺にあった富士浅間神社かもしれない。

「通釈」そこで住居に帰って来て、筆の赴くままに、十首の和歌を詠じた。わざわざ尋ねて行ってでも、どうしても見ないでいられようか、富士山ではないが、それはそれとして有名な小夜の中山を。

富士山とはまさしくこれなのだ、雲の間にその姿を現し、山頂には珍しい秋の初雪をいただいている山が。

同じく山に登るのなら、富士山の深雪を踏み分けてみたいものだ。我が身は老いて、蛭の子のように足はなえて苦しいけれども。

清見瀉は富士山を背後にするが、そこから吹き下す山嵐に浪も荒れ、荒垣のあたりに白浪の飛沫が富士山の見えない雪を吹き散らしているようにみえることだ。

富士の嶺は空高く聳えているが、その高さは、たとえ大比叡の山を二十重ねあげても、どうして及ぼうか。

時節をわきまえず雪をいただく山、それはそれとして、その麓を流れる富士川、それまでも雪のように高い白浪が立っていることよ。

夜が寒いためであろうか、鶴が岡辺の鶴の音が悲しく聞こえる。その翔の霜の上に、さらに富士の白雪が降っているのか。

(足高山は) その嶺を崩されて浮島となることがなかったら、富士山と雲間に並べ、その高さを比べてみようものを。

吾妹子のようなつややかな黒髪という名の黒髪山は、富士山の嶺に積っている白雪を白髪だと見て、哀れと思うだろうか。

宿願だった富士山はやっと眺望できた、この上は、さらに白河の関に行き、(能因法師が聞いたという) 秋風を聞きたいと、しきりに思うことだ。

このように詠じて、富士浅間にこの和歌を奉納した。

【考】○十首の富士山詠歌に対し、「正広日記」では、「さて立ち帰りて筆に任せて、十首詠み侍る」とあるだけだが、「松下集」では「かへりて筆にまかせ、富士をことごとく入れて十首よみ侍る」とある。その指示通り、十首には、すべて「富士」という文字を入れて詠歌している。ただ六首目は、山としては「時知らぬ山」で「富士」の文字はないが、「富士川」がそれを果しているのであろう。○十首は富士山を眺望できた感動に支えられた連作だが、富士山の高さ、珍しい秋の雪、富士山の周辺の清見瀉、富士川、鶴が岡、足高山、黒髪

山なども取り込んで、多角的に詠じている。特に冒頭に、すでに通過して来た歌枕「小夜の中山」を配し、最後にまだ見ぬ「白川の関」への思いを詠じて締め括っているところなどからみて、ある程度の構成を意識していると思われる。

五 祈禱歌奉納

此(の)寺の本尊薬師如来にてまします。幸(さいは)の事と覚えて、桂厚祈禱(いただ)のために、筆に任(ま)かせて詠(よ)じ侍(ま)る歌、

春

南(な)ぞへなき君(きみ)が恵(めぐ)みを日の光(ひのあ)に照(あ)らして春(はる)や来(き)ぬらん
無(む)かふより憂(うれ)き世(よ)の性(さが)と厭(いと)ふ身(み)をよしやと許(ゆる)す花(はな)の影(かげ)哉(や)

弥生山暮(やよひやま) (れ) 行(く) 空(く)に契(く) (る) らん春(はる)もとまらぬ人(ひと)相(あ)いの声(こゑ)

夏

くみ絶(た)えし野(の)中の清(き)水(みづ)いつしかに又(また)尋(たづ)ぬべき夏(なつ)は来(き)にけり
しきたへの袖(そで)の泪(なみだ)をむつまじとなれも昔(むかし)に匂(にお)ふ橘(たちばな)

瑠璃(るり)と見る人(ひと)と魚(うい)との心(こゝろ)にもまさる御被(みま)や袖(そで)のうは浪(なみ)

秋

竜(りゅう)の住(す)む都(みやこ)も秋(あき)や白浪(しろなみ)の立(た)ち(ち) そふ奥津(おくつ)初風(はつかぜ)の声(こゑ)
くり返し昔(むかし)「を」今(いま)にすむ月(つき)の廻(めぐ)る光(ひかり)やしづのをだまき

わくらばに染(そ)めし梢(えだ)を初(はつ) (め) にて時雨(ときり)につくす秋(あき)の色(いろ)かな

冬

うき世とて誰も朝夕嘆く身を知らでいづくと冬の来ぬらん

庭の松をしの衾は知らね共先(づ) あたたかに積もる雪哉

世の中の人の心をさく梅のいそぐと年や暮(れ)て行(く)らん

雑

らむとなる関の東も九重も皆おさまりて道ぞただしき

いまははや雲霧晴れて富士の雪都に見つと人に語らむ

かく詠み侍るしるしにや、少(し)取(り)なをし侍る。

「語釈」○此の寺―「富士浅間に奉りし」を受けた文脈だと、「富士浅間」をさすことになる。ただ神社に「本尊薬師如来」は不都合。当時は神仏混濁なので「富士浅間寺」といったものも合祀していたか。一方、正広が滞在していた長楽寺とも考えられるが、この寺の本尊は釈迦如来で一致しない。なお存疑。○薬師如来―薬師瑠璃光如来とも。医王として人々の病を癒し、苦悩を救う仏。東方の浄瑠璃世界の救主。左に日光菩薩、右に月光菩薩を脇侍とし、十二神像を眷属とする。○桂厚―既出。病いに臥していたので、その祈禱のために、病気を癒す薬師如来に詠歌を奉納。○「南ぞへなき」の歌―「なぞへなき」は比べるものがない意で、ここは「君が恵み」の広大さを込める。例歌「なぞへなく思ふ別をなにかもみる世に我が身めり逢ひけん」(春夢草)。「日の光は春の太陽とともに日光菩薩も暗示。○「無かふより」の歌―「むかふ」は、ここでは桜の花に向うこと。その美に執着する我が身を「憂き世の性と厭ふ身」と仏教的な立場から認識したものの。例歌「向ふよりやがて涼しき心かな日影をうつす蓮葉の露」(松下集)。「よしやと許す」とは、花がまあそれでもいいではないかと許す意か。○「弥生山」は弥生(三月)の頃の山。春の山。例歌「やよひ山春の名残もほのかなりなにぞはありて有明の月」(新統古今集・春下・飛鳥井雅世)。「入相の声」は日没の頃に寺々でつく鐘の音。例歌「山寺の入相の鐘の声」に今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」(拾遺集・哀傷・読人し

らず)。類想歌「契るとも人の心はくれがたみはる日をいそげ入あひのこゑ」(松下集)。○「くみ絶えし」の歌―「野中の清水」は、野の中にある清水と普通名詞とも解せるが、ここは「いにしへの野中のし水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ」(古今集・雑上・よみ人しらず)などから、神戸市西区岩岡町野中にある歌枕。古今集の古注釈書には、この清水が病いに功あることを知っている人のみが汲むとの解釈があり、ここもその意を込めるか。○「しきたへの」の歌―「しきたへの」は敷物にする袴。寝具であることから「袖」「衣」「床」などにかかる枕詞。「袖の泪」は懐旧の涙に濡れた私の袖。「なれ」は「橋」をさす。「むつまじ」とするのは、ともに昔を偲ぶところが通い合うため。参考歌「さつきまつ花橋のかをかげば昔の人の袖のかぞする」(古今集・夏・よみ人しらず)。○「瑠璃と見る」の歌―「松下集」は上句が「るり」と見て涼しき魚の」と異文。「正広日記」の方が原作で、「松下集」では改作したか。「御祓」は身にけがれや罪のあるとき、河原などに出て、水で心身を清めること。「瑠璃と見る」の「瑠璃」は薬師如来の浄土で、無数の菩薩が住むという「瑠璃の浄土」(地が瑠璃でできている)の「瑠璃」をさし、ここでは御祓のとき、袖の上に散る白浪の玉を重ねている。「心にもまさる御祓」の「御」に「身」を掛ける。「松下集」の「涼しき魚の心」には出典があろうが未詳。参考歌「釈教、釈迦薬師地藏観音」の歌題で「かげきよきるりの光の国の内はさこそ月日もせずしかるらん」(雪玉集)。「るり」をしく霞ながらにわか草の朝の原は露のしら玉」(春夢草)。また「法華経」(法師功德品)に「この経を受持し、若しくは誦し、若しくは書写せば、八百の身の功德を得て、清浄の身の、淨き瑠璃の如くに、衆生の見んと喜うところなるを得ん」とある。なお、この和歌の意、明解を得ない。○「竜の住む」の歌―「竜の住む都」とは、海底にある竜宮を念頭にする。「竜宮」は竜王の宮殿。大海の底にあるといわれる想像上の宮殿。世の中に仏の教えが行なわれなくなったとき、竜王が財宝・絵巻などを大事にする所。「秋や白浪」は「白」に「知ら」を掛ける。参考歌「神代より老せぬ竜の宮」とよさの湊に春や来ぬらん」(松下集)。○「くり返し」の歌―底本は第二句「昔に」、他の諸本及び「松下集」で「昔を」に校訂。「しづのをだまき」(倭文の苧環)の「しづ」は古代の織物の一種。「をだまき」は、その「しづ」を織る糸を巻いたもの。「繰る」「繰り返し」などに掛かる。本歌「いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」(伊勢物語・第三十二段)。「すむ月」は「澄む」と「今にする」を掛ける。○「わくら

ばに」の歌―「わくらば」は病葉で、夏、青葉に混って、赤や黄色に変色した葉。ここは、「たまに」「まれに」の意も掛けるか。「時雨」は秋の季節に紅葉の色を深く染めるもの。従って「時雨につくす」は、時雨がすべてを紅色に染めつくす意。参考歌「わくら葉もともに千しほの梅の雨時雨となりて紅葉しぬらん」(松下集)、○「うき世とて」の歌―「誰も朝夕嘆く身」は、この現世は憂き世だと誰しも朝夕嘆いている身のこと。「知らでいづく」とは、そんな身であることも知らないで、どこであろうとの意。寒い冬の容赦のない到来を詠歌。○「庭の松」の歌―「をしの衾」は「鴛鴦の衾」で男女が共寝すること。またその夜具。参考歌「さゆるよにをしのふすまをかたしきてそでのこほりをはらひかねつつ」(秋篠月清集)、「たたみもつ鴛の衾を我にかせ独おきゐてさ庭の月」(松下集)。「あたたかに積もる雪」とは、庭の松に積った雪を綿に見立てたもの。「源氏物語」(末摘花)にも「松の雪のみ暖たかげに降りつめる」とみえる。○「世の中の」の歌―「人の心をさく梅」の「さく」は「避く」と「咲く」とを掛ける。「梅」は隱遁者の愛する花。「いそぐ」は準備する意。○「らむとなる」の歌―「らむ」(乱)は応仁の乱を念頭にする。「関の東」は逢坂の関より東。今の関東地方よりも広い地域を含み、中部地方以東をいう。関東も九重(皇居のある都)も、戦乱が治まり、正道が行なわれる平和な世となることを予祝。○「いまははや」の歌―「松下集」は第五句「人の語らむ」と異文。「正広日記」の「人に語らむ」だと、作者正広が鬼岩から雲霧の晴れた富士山の雪を見たことを、早く都に帰って人々に語ろうの意、「松下集」の本文だと、富士山を覆っていた雲霧がすっかり晴れ、そこに積った雪を都からでも見えた人が語るだろうかの意となろう。いずれにしても、「雲霧晴れて」に、世の中の暗雲が晴れ、平穩になることへの祝意を込める。○少し取りなをし侍る―桂厚の病気が少し恢復したこと。

【通釈】

比類もない広大な君主の恩沢を、日の光のように四方に照らして春がやってくるのであろう。

美しい花に向うのは、憂き世の性だと我が身を厭うてみるが、まあそれでもいいではないかと許す花の下蔭であることだ。

弥生山はその名のように、春が暮れて行く空に約束しているのか、入相の

鐘とともに春は止まらず去ってゆくことだ。

昨年の夏にすっかり汲み絶えていた野中の清水を、再び訪れるべき夏の季節が早くも到来したことだ。

懐旧で流す私の袖の涙を陸まじいと、おまえも昔のことを思い起こして匂っているのか花橋は。

瑠璃とみる人や魚の心にもまさるよ、身を清浄にする御祓のとき、袖の上に散る浪の白玉は。

竜の住んでいるという海底の都でも、秋の到来を知るのであろうか、海上の白浪に吹きわたる初風の声によって。

幾度も繰り返しながら昔のことを今に蘇らせて空に澄みわたって廻る月の光は、まるで倭文の苧環のように繰り返すことよ。

病葉のように、たまさかに赤く染まっていた梢を手始めにして、やがて時雨れによって、すっかり染め尽くされて秋色になることだ。

この世は辛い憂き世だと誰も朝夕嘆いている身のあることも知らないで、それにおかまいもなく寒い厳しい冬はやって来るのであろうか。

庭の松に鴛鴦の衾の夜具は知らないけれども、まずは雪が綿のように暖かそうに積っていることだ。

世の中の人の心を遠ざける梅が、咲く支度をしているうちに、年が暮れて行くのであろうか。

戦乱となっていた逢坂の関の東の方も、また都の方も、皆治まって、政道が正しく行なわれるようになった。

今はもう、これまで覆っていた雲も霧もすっかり晴れ、富士山の雪をはっきり見たと都に帰って人に語ろう。

このように詠じた効果であろうか（桂厚の病気が）少し恢復した。

【考】○桂厚の病氣平癒のため、寺の本尊である薬師如来に「南無薬師瑠璃光如来」の一字を、各歌の冠に置いて十四首を詠じて奉納したという。「松下集」では、「此寺本尊薬師にてまします、幸の事にて彼宝号を上におきて祈禱のために詠じ侍り」と詳記する。中世には宝号を冠に置いた奉納歌が盛行したが、ここもその実例である。○十四首は、春・夏・秋・冬の四季に各三首を配し、祈禱歌なので恋歌を排し、最後を雑歌で構成する。十四首のなかには、桂厚の病氣平癒を直叙する内容のものはなく、冒頭に天子のあまねき恩沢を詠じ、雑歌で乱世の鎮静を祝する。そこに戦乱に疲弊し、平穩な世の到来を祈願する思念が強く表白されている。○「正広日記」では、八月二十六日に小河へ出掛けて富士山を眺望せんとして果せず、むなしく帰宅、その夕刻より桂厚が病氣になったが、九月一日頃に少し恢復に向かったとする。その後、鬼岩から富士山を眺望、その感動を筆に任せて十首に詠みあげて富士浅間に奉納、ついで桂厚の祈禱歌十四首を、本尊の薬師如来に奉ったところ、桂厚の病氣が恢復したとする。これに対して「松下集」の記述は、富士山詠歌十首を「富士浅間に手向け侍る、そのち桂厚つれ侍るに不例のことあるに、此寺本尊薬師にてまします」と、桂厚が病氣に臥した時点が相違する。が、ここも「日記」の記述の方が本来のものではなからうか。

（未完）